

僕はつらい。生きていてつらい。かわいくて優しい彼女でもいれば少しは楽しいだろうに、一人で起きて、一人で顔を洗って、一人で朝飯を食って、一人で電車で揺られて…独りぼっちでただ毎日を生き、それを数万回繰り返した挙句いつの間にか死んでいる。ひどいもんです。毎朝そう思います。しかし、孤独に電車で揺られて大学にたどり着けば、数は少ないですが友達はいますしサークルの先輩方には色々と面倒を見てもらえたりもします。辛いことがあれば相談を聞いてくれる家族もいる。一日終わって、また孤独に電車で揺られて帰りながらも、心の中では友達との思い出を反芻して楽しさに浸っていたりします。まあ生きているのもそんな悪くはないかな、と。人間って現金なもんですね。わたしたちって、一人のように思えるときはあっても結局全然一人じゃないんですよ。ちょっと周りを見渡してみましょう。僕は今こうやって演台に立って弁論をしていますが、この場を提供してくれるのは我が早稲田大学雄弁会と、慶應義塾大学弁論部です。また、我々がサークル活動をしたり勉強したりできるのは、学習を援助してくれる大学のおかげ、また我々が日常生活を送れているのは行政サービスを施してくれる区や街、国民の生命を保障してくれる日本国のおかげ…そう、私たちって案外一人じゃなかったりして、いろんな人のお世話になってるんですね。僕たちは様々な集団に所属すると同時に、その援助によって生きている。また、所属するもののために何かしら関わって、その見返りに援助を受けているともいえる。大学であれば学費、サークルであれば会費、自治体や国家であれば税金…私たちは、一人では生きていけないがゆえに、様々なグループを作り、その一員としてその共同体に参画してその見返りに生活を保障してもらっています。僕たちがこうやって日本で暮らして生かしてもらっているのも、税金を払ってるからですよ。これは give and take の関係にあるといえます。ですがもし僕たちが会費を払っているのにも関わらず活動に参加させてもらえなかったらどう思いますか？おかしいですよ？世の中の社会問題って、この give and take の関係が崩れたときに起こるものなんじゃないでしょうか。だからこそ僕たちはここで社会や政治について語って、お世話になっている人たちがそうした問題によって社会の中で独りぼっちになって、give and take の関係から外れてしまうことを避けようとしているんです。トラックドライバー、生活保護、高齢者事故…直接会ったことはなくても、もしかしたら僕たちをお世話してくれたかもしれない人たちが、自分たちだけではどうにもできない社会問題によって一人で悩み続けている…そうなるのを防ぐために僕たちは今ここで弁論しているんじゃないですかね？

だからこそ、我々はこの give and take の関係を崩さないためにその共同体を守っていかうとするんです。身近な例で言えば、私たちは国からさまざまな行政サービスや社会保障を受けています。大きな例で言えば、戦争です。70 年前のあの戦争で、日本人は狂信的ともいえる犠牲を払ってまで自国を守ろうとしました。でも、なぜそこまでして国を守るか、考えてみてください。そこには give and take の契約関係だけでは説明できないものがあります。自分が命を捨ててまで守らなければならないものって必ず感情的な動機付けが必要になるはずですよ。戦前も戦後も、日本国家はその国民を保護し、曲がりなりにもその生命を守って

きました。そもそも、一人で自分の命を守っていくのがあまりにも大変だから、僕たちは国家ってものを作ってそこに自分の命を預けてるんじゃないですか。One for all, all for one。そんな言葉があります。自分という個人を保護しここまで育ててくれた国家と、そこに生きる人々のために、自分は命を捨てて死んでいく。この One for all, all for one の精神こそが、共同体を形作る基本的な精神なんですね。共同体は、give and take の単純な契約関係ではなく、精神的な結びつきを含んでいるものなんです。これは、個々人の信頼関係に限った話ではありません。地域社会と住民、国民と政府、もしくは国民の間にもある種の(想像上の)信頼関係があるといえます。だからこそ、社会保障・生活保護においては国家は国民の総意として All for One を体現しますし、その All、すなわち自分以外の国民への恩義に報いるためという非合理的な感情に従って日本人は特攻までして必死に国を守ろうとしたんじゃないですか。

しかし、その One for all を鮮烈に体現したはずのあの戦争(いや負けたじゃん)から、僕たちが積み残していることがあります。沖縄です。あの戦争以来、沖縄には米軍基地が集中したままです。

Give and take の関係が崩れてしまい、どちらかが過多になってしまっている状態。日本人全体の命を守るために、僕たちは沖縄の土地を take していますが、僕らは彼らにその分 give できているんでしょうか？何か give しているとして、果たしてそれは釣り合っているんでしょうか？そこにはどうしても否定できない、一方的な負担があると言わざるを得ません。まあ沖縄に関してはアメリカの都合や地理的要因もあるでしょう。ある意味あそこに基地が集中するのは非常に合理的な事ではあります。ですが、僕たちはそれを言い訳にしまっただけではないんですか？共同体の仲間の負担に思いを致すことなくそれを是認してしまったら、いったい沖縄とそれ以外の僕らの間に何が残るんでしょうか？Give and take の関係が崩壊し、All for One の精神が失われてしまったら、いったいそこに共同体としての結びつきが残る余地はあるのか？

もう一つ例を挙げましょう。2年前のシリアの日本人人質事件。私たちは葛藤しつつも、結局二人の人質を見捨てる道を選びました。もしあそこで身代金を払っていたら再び日本人が誘拐されることになってしまっていたかもしれない。IS の要求を呑むのは国際社会に対する責任の放棄だ。確かにそうでしょう。あの事件には僕たちとあの二人だけがいたのではありません。他国に対する配慮、未来の日本人に対する配慮もまた理にかなったものだったでしょう。ただ、私たち、国民である私たちが、果たしてその正当性を合理性に求めてしまっているのでしょうか。そこに、命を見捨てる胸が張り裂けそうな葛藤はあるのでしょうか？ただただツイッターで「あの判断は正しかった」と呟くだけで、何の痛みも覚えていないのではないのでしょうか。僕たちが合理性という便利な言い訳に頼って彼らを見捨てることを容認してしまったとき、僕たちはまた All for One の精神を捨ててしまうことになるんですよ。

確かに、僕たちがこうして国家などの共同体を作るのって、やっぱり自分の身を守るため

であったり合理的な理由なんですね。ホップズもいうように、もともと国家って人間が自分たちの命を守るために土地の人間同志で集まって作ったものなんですよ。一人一人の人間同士が殺し合う中で自分自身の身だけ守るよりも、みんなで守り合ったほうが合理的に身を守れますよね。そういうふうには身を守るために作られた合理的な契約が国家なんですね。でも、じゃあ何であの戦争で日本人は自分の命を投げ捨ててまで国家の為に戦ったのか？合理的な、無味乾燥な契約関係だけであるなら、ああも狂気的とも言える犠牲を払うことはなかったはずですよ。

自分を守ってくれた国家に対する恩義、さらに言えばその環境を作り出してくれている人々。それらを守るために戦う。特攻隊員の遺書を見ると、家族を守りたい、どうかお母さん元気でいてください、そんなつたない文面から、何とも言えず切実な想いが伝わってきます。その中にも、何通かに一つは、「自分はお国のため、日本人のために死ぬのだ」と言う。洗脳されていたと言えば単純です。しかし彼らは間違いなくそこで死に、私たちの生活はその犠牲の上にある。

でも日本人の大半は、お互いに会ったこともない人たちのはずですよ。そんな人たちのために、何故死を選ぶことまでできるのでしょうか？それは、イメージですよ。

共同体内に僕たちの目に見えない「他者」という

ものが存在している、そういうイメージがあるからですよ。自分の身の回りの人たちだけ、自分の知り合いだけに親切にしているようでは、その小さな範囲の中での共同体は作れても、国家という大きな共同体は立ちいかなくなってしまうんですよ。

つまり、結局僕たちはイメージという非合理的なものによってつながれている。それを僕らは「愛国心」と名付けた。しかしその非合理的なものを信じ続けた結果起きた悲劇によって、僕たちはその非合理的なイメージを捨てようとしているのではないのでしょうか。

でも捨てられない。なぜか、私たちは結局独りぼっちじゃ生きられないからですよ。生きるため、僕たちは誰かとつながらなければならない。しかしそのつながりを結ぶのって、結局は感情なんですよ。一人で起きて、朝飯を食って、一人で電車で揺られて…独りぼっちでただ毎日生きる。誰だってそんなのが嫌だからですよ。まあ生きてるのもそんな悪くはないかな、と、そう思いたいのが人間ですよ。でもそんな時にも、我々は「他者」と

いうイメージを否応なく突き付けられる。ニュースで、あるいは友達との会話で。だけど、それを想像するのは難しい。だからいつの間にかそれはゆがんだものになってしまう。しかしそこで立ち止まって考えてほしい。私が見ている「彼等」は本当の「彼等」なのだろうか？どこか我々のイメージできないところで苦しんでいる「他者」はいないのだろうか？無論我々は「他者」を正しくイメージすることなどできません。しかし、もしそのような人がいたらどうかその人たちの為に行動することをためらわないで下さい。それはひいては僕たち自身のつらさを軽減していくはずですよから。